便利なイルカ式睡眠法

イルカは、どことなく愛 嬌 があって、飼育 係 がさしだす餌にジャンプ一番飛びついたり、言葉を持っているらしいと言われていたり、海の中に住んでいるわりには、けっこう親しみを感じさせる生き物だ。

けれども、意外に知られていない面を持っている。

イルカはどうやって眠るのか、というのもその一つで、ずっと謎だった。海の中で生活してはいるが、 周 知の通りイルカは哺乳類。肺呼吸をしているわけだから、何分かおきには海面に顔を出して、呼吸をしないと溺れてしまう。ふだんは時々浮かび上がればよいのだが、眠っているときはどうするのだろう。こっくりこっくり居眠りしているうちに、溺れ死んでしまったイルカは見たことがない。

というわけで、イルカはいかにして眠るのか、興味が持たれていたのだが、外から観察しただけでは、いつ眠っているのかわからなかった。

そこで、ソビエトの動物進化形態学・生態学研 究 所のアレクサンドル・スーピン博士は、イルカの脳に電 極 を植え込み、脳波を無線で受信することで、イルカが、いつ、どうやって眠っているのかを調べてみた。

すると意外な事実を発見された。

なんと、イルカは脳の左右の半球を交互に睡眠させていたのである。一方の半球が眠っているとき、他の半球は目覚めていて、これを交互に繰り返していたのだ。

なるほど、これなら、睡眠中にも数分おきに海面へ顔を出して、呼吸できるから、溺れ死ぬ心配はなくなるわけだ。

いや、実に、なんとも便利な睡眠法があったものである。

忙しい現代人のなかには、眠らなくてすむようになったらどんなにいいだろうと考えている人もいるだろうけれど、このイルカ式睡眠法なら、そんな夢もかなうかもしれない。午前中は脳の右半球を眠らせておいて、午後は左半球を眠らせる、といった具合にやればよいわけだ。

スーピン博士も、そう思ったのかどうか、この脳のモデルを応用して、新しい睡眠薬の開発などができるかもしれないと、さらに研究を進めている。

最近は、人間の大脳の左右両半球がそれぞれ異なる性質や機能を持っていることについての研究が進んでいるから、上手な使い分け方などというのも開発されるかもしれない。

それにしてもまだまだ、人間の大脳には未知のことが多い。おそらく、脳こそは、２１世紀に残された、地球上最後のフロンティアであろう。

（大宮信光　他著『サイエンス・スクランブル』新潮社より）